

受賞者手記目次

第64回社会貢献者表彰 受賞者30組(敬称略)

NPO法人 子どもセンター・ピッピ	30
子どもサポート H&K	32
House of Joy	34
NPO法人 自立支援事業所ベトサダ	36
認定NPO法人 ヒカリカナタ基金	38
札幌おやこ面会交流の会(あやの会)	40
社会福祉法人 ゆうゆう舎 ぱれった・けやき宮城野	42
NPO法人 移動支援Rera	44
認定NPO法人 フードバンク北九州ライフアゲイン	46
NPO法人 北東北捜索犬チーム	48
NPO法人 YOU&MEファミリー	50
NPO法人 心魂プロジェクト	52
株式会社 アップルファーム	54
NPO法人 こうちネットホップ	56
NPO法人 日本動物介護センター	58
NPO法人 Piece of Syria	60
NPO法人 LOOB JAPAN	62
八王子国際友好クラブ(HIFC)	64
松川電気株式会社	66

認定NPO法人 アジア車いす交流センター (WAFCA)	68
NPO法人 J'One World	70
一般社団法人 みずほの家.....	72
NPO法人 徳之島虹の会	74
認定NPO法人 シャイン・オン・キッズ	76
NPO法人 にほんご豊岡あいうえお	78
NPO法人 子どもセンターぬっく	80
NPO法人 Support for Woman's Happiness	82
NPO法人 Colorbath	84
認定NPO法人 あっちこっち	86
NPO法人 トラストサルン釧路	88

対象となる功績内容

- 精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
 - 困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
 - 先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
 - 海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
 - 家庭で実子に限らず多くの子どもを養育されている功績
- その他の功績
-

NPO法人 子どもセンター・ピッピ



理事長
大倉 浩

埼玉県

弁護士として少年事件、いじめ等の問題に携わり、弁護士以外に少年たちの出所後の居場所探しや、未成年後見人になるなどして奔走してきた大倉浩さんが、埼玉弁護士会の有志と準備を始め、行政ではすぐに対応できない子どもたちの命に関わる緊急のケースに対応できる民間のシェルターを2017年に開設し運営している。SOS電話は、本人（県内、県外）、スクールカウンセラー、教師、児童相談所からで、今日帰る場所がない、帰れる家がない子どもの緊急避難所となっている。対象は13歳～19歳の女性のみで、滞在期間2か月の集中支援。専門のスキルを持った女性スタッフが24時間常駐し、温かな食事と安心して休める個室を提供したり、料理やお菓子作り、植物栽培なども共に行う。また人間不信に陥っている子どもの代弁者になるべく、子どもとの委託契約に基づき、子ども担当弁護士（通称、コタン）が、子どもに就く。コタンは、シェルター利用中の子どもの相談、意思決定支援、親との交渉、法的手続きなどのサポートを行い、信頼できる大人として子どもを支える。頼れる場のない子どもたちに安心して休める場所と、前に進むきっかけを与え、幸せな人生を送れるように尽力している。

私は、平成28年（2016）年に「NPO法人子どもセンターピッピ」を埼玉県で初めて設立しました。裁判所に勤務して書記官をしていた私に、3人の少年の共犯による恐喝事件の少年審判を傍聴する機会がありました。3人のうち反省の色が薄い2人の審判では、親が決定に怒りをあらわにして裁判官にくっついてかかった異様な光景に「事件を起こす少年は家庭環境に問題を抱えている」と実感しました。

その後、弁護士になり、多くの少年事件を担当することになりました。少年らを一時的に弁護するだけでは不十分で、特に少女たちを支援する場、居場所の欠如を痛感してきました。少女が安心して過ごせ、信頼できる大人と出会える場所の確保が必要不可欠と考え、2017年にピッピの運営を始めました。

しかし、シェルターの施設の運営は簡単ではなく、財政難、人材難で二度に亘り施設を一時休止。県内を講演して回り、支援金を集めました。人員の確保も容易ではありません。シェルターでは常勤4人、非常勤4人の職員を配置しています。常勤の職員は皆、傷ついた少女のケアに熱心にあたってくれています。弁護士業と二足のわらじは負担ですが、それでも続けるだけの喜びがあります。

昨年ピッピで成人式を迎えた女性のために、ボランティアの協力で晴着、着付けを行い、施設内で成人式を開きました。私が彼女に書いた「今まで生きてくれてありがとう。自分を大切にしてください」との手紙に、女性がピッピから旅立つ時に「人生で一番うれしい言葉だった」と手紙をくれました。今までの苦勞が報われる瞬間でした。このような喜びを得るため、日々活動しています。



NPO法人
子どもセンター・ピッピ



▲ピッピだより ニュースレター



子どもサポート H&K



代表

大石 仁美

京都府

全国的にも珍しい個人が運営する病児保育施設。設立者で代表を務める大石仁美さんは、看護師や保健師、養護教員として勤めながら、シングルマザーで3人の子どもを育てたが、幼い我が子が体調を崩していても、枕元にご飯を置いて仕事に行かざるを得ず、結果子どもが肺炎を発症してしまうなど、苦い経験がある。男女雇用機会均等法成立後15年以上が経っても、子育て中の不安や働きづらさを抱える母親が多く、こうした働く親が一番困っている病児保育に取り組みたいと、2003年に病児保育施設を設立。病後児の保育施設はあっても病児の施設は京都でも初だった。大石さんのパートナーも私立進学校を退職後、60歳を過ぎて専門学校に入学。保育士と社会福祉士の資格を取得。ともに施設運営に携わってきた。運営に当たっては人脈の多いパートナーの力は大きいものだった。利用を会員制にしているのは、支援者たちと討議をし、利用者は何を求めているのか、推考を重ねる中で確立したものである。事前予約不要で、園からの急な呼び出しに親に代わってお迎えに行き、必要時は提携医の診察もありというもので、利用者との信頼も厚いものになっている。

(推薦者：認定NPO法人 心臓病の子どもを守る京都父母の会 理事
余田 由香利)

この度は社会貢献者表彰で、私のような小さな者に光を当てて頂きましたこと、感謝にたえません。

受賞された皆様方の素晴らしい活動に触れ、気負いなく、やりたいことを信念をもって継続していくこと、小さな一粒が大きな塊になり、人、動物、植物、大地のすべてが愛と生命で肅がっていくことを実感した壮大な会でした。この幸せなひと時をありがとうございました。

私たちの施設は2003年に設立し、今年で22年を迎えます。当時、病後児保育施設はありましたがまだ病児保育施設はなく、幼い子どもを抱える親たちは周囲の冷たい視線を横目に仕事を休まざるをえませんでした。有能な女性たちが働けないことは大きな社会損失だと、退職後に私財を投じて病児保育施設を立ち上げた次第です。

多くの方の意見を取り入れて発足した施設は口コミで次第に利用者も増え、自分たちもやってみたいという見学者が数件現れて嬉しい限りでしたが、採算がとれないという理由で立ち消えになったようです。公的支援を受ける方法もありましたが自分たちの掲げる理念には適合せず、今に至っております。

親が一番困っているところに焦点を当てた結果、予約なしでいつでも利用できる、園からの急な呼び出しに親に変わって対応できるというサービスを提供し、これらのごとを可能にするために会員制にすることで、親からは安心して働けると随分と喜ばれました。しかし、より重要視していることは子どもからの視点です。しんどい、不安で淋しいといった気持ちに寄り添い、安心して楽しく過ごしてもらいたい。子どもサポートはそうした意味を込めた「H&K」、すなわち保育と看護です。

さて、ほどなく園が休みの時、利用者から一時保育もしてほしいという要望ができました。子どもに関わる仕事をしている人たちが集結し、楽しんで計画を立てました。

春は加茂川べりを水鳥や草花を愛でながらお散歩。夏は水遊び、冬は堤防で草スキー、空き箱で工作もしました。また、交響楽団の方の協力で親子で楽しむ音楽会も開きました。

子どもの元気な時の生き生きした姿にも接し、成長と一緒に楽しめる幸せ。

一時保育だけは行きたいという子も現れ、「親と子を丸ごと支える会員制病児保育施設」として成長してまいりました。これからもニーズを大切に頑張っていきたいと思えます。



▲「いない いない ばあ〜」手作りおちゃ



▲「元気のゲンちゃん」のお人形で腹話術をしてくれるボランティア



▲「抱っこ袋」知人のお手製です



▲お盆の一時保育 2008年夏



▲プロの交響楽団（会員）による親子で楽しむ演奏会



▲保育専門学校の学生と病児実習風景

House of Joy



事務局長・副院長
澤村 信哉

フィリピン

House of Joyは故烏山逸雄さんが1997年フィリピンのダバオに設立した児童養護施設で、烏山さんが青年海外協力隊員だった時の仲間や、地元長崎のカトリック教会の人たちが中心となり、全国の教育機関や教会からの支援によって28年にわたり活動を続け、これまでに300人以上の子どもたちを養育してきた。子どもたちはこの施設にいて、18歳まで学校に通うことができる。また近所の子どもたちにも奨学金を出して、毎年100人の子どもたちが学校に通えるようにしている。House of Joyを卒業した子どもたちは、教師やNGOの職員、日本語教師、日本企業の社員、運転手、福祉局の職員などの仕事に従事している。大学教授になった烏山さんの仲間が、日本の学生を連れて一週間の研修プログラムに毎年訪れるが、学生も子どもたちも対等な立場で交流し、互いに刺激を受けて充実した時間を過ごせるような内容となっている。烏山さんの亡き後、事務局長の澤村信哉さんが年に一カ月ほど帰国し、全国各地で講演を行って現地の活動を紹介し、寄付の呼びかけなども行うが、聴講した人の中からダバオに移住して起業するひとが現れるなど、ダバオの振興にも一役買っている。

(推薦者：GA Environmental Construction Corp. 代表取締役 鮎澤 優)

このたび、私たちの児童養護施設ハウスオブジョイは、社会貢献者表彰という大きな賞をいただきました。28年の活動が認められ、本当に光栄に思います。授賞式には現地から院長と施設の卒業生も連れていくことができ、素晴らしい経験をさせていただきました。他の受賞団体の方々とは交流する時間もあり、私は晩餐会の席で演奏を披露する機会もいただけたので、たくさんの方々が話しかけてくださり、多くのつながりが生まれ、大きな式典というものの意義を、改めて実感することができました。本当にありがとうございます。

私たちの施設は、烏山逸雄という一人の元青年海外協力隊員が始めたものですが、彼一人の力だけでできたものではありません。地元、長崎のカトリック教会の方々の生き方がこども時代の烏山に「動機」を与え、当時の青年海外協力隊の訓練所所長だった粕谷神父の導きによってフィリピンに派遣され、そこで生涯の伴侶となる地元女性と出会ったことで、ハウスオブジョイはスタートすることができました。その後、予想以上の困難にぶつかることもありましたが、協力隊時代の仲間たちが資金的にも精神的にも支援をしてくれたり、若者たちをハウスオブジョイに連れてきてくれたりすることで、支援の輪が広がり、今も活動を継続することができています。この場を借りて、支援してくださっている皆様に感謝を述べさせていただきたいと思います。本当にありがとうございます。

私たちのような児童養護施設に求められているものは「継続」です。こどもたちを長期的に育てていくのが一番の使命なので、毎年のように目新しいプロジェクトを起こすことよりも、地道に、日々の生活をこどもたちと過ごしていくことが大事なんです。新しいプロジェクトをやる活動の方が注目も浴びやすいですし、寄付金や助成金も集

まりやすいので、私たちの運営は常に火の車です。ですが、目先の活動資金のために、「本当に必要なのかもよく分からないプロジェクトをひねり出す」ようなことはしたくありません。これからも、こどもたちが笑顔で暮らせる場所であり続ける、というシンプルな目標を掲げて活動を続けていきたいと思えます。多くの方々がこの機会に私たちの活動に興味を持ち、遊びに来てくれたら何よりの幸いです。こどもたちと一緒に来訪をお待ちしております！



▲こどもたちは地元の小学校、中学校、高校に通っています



▲ハウスオブジョイは20人のこどもたちが暮らす児童養護施設です



▲学校の宿題は大きい子が手伝います。ちなみにこの子はその後、教育学部に進学。来年度から教師として働きます



▲今年高校を卒業した3人。1人は船員になるために就職、1人はマンゴー加工工場に就職、1人は教育学部に進学しました



▲小さいころから掃除や洗濯、料理を手伝い、生きる力を育てます



▲敷地内には畑もあって、自分たちで育てた野菜が食卓に並びます

NPO法人 自立支援事業所ベトサダ



代表理事

菅原 勇也

北海道

創設のきっかけは、クリスチャンの故真鍋千賀子さんが1997年に札幌駅で一人のホームレスの人に出会い、支援したこと。食料支援だけでは解決できないと考えた真鍋さんは、2009年自立支援事業所ベトサダを設立、今年で団体は活動16年目を迎える。生活困窮からの脱却と自立を目指し、食事、住まいの提供（ベトサダ荘）、生活支援、就労支援（無料職業紹介事業）、面接や通勤等の送迎支援、病院への送迎、医療費減免手続のサポート等の医療支援・債務整理同行と自立するための住居相談、不動産屋の紹介・同行支援などを札幌市内で行っている。ベトサダ荘は定員20名で、男性のみを対象とし、入居期間は3ヶ月の期限を設け、衣食住を無償で提供する。年間およそ100名近い利用者がいる。相談者の現状、過去、障がいの有無、要望などを聞き取り、支援の方向性を考え、必要があれば他団体へ繋ぐこと等も判断する。再起と自立を第一に考え、就労自立または、生活保護自立の選択までともに考え伴走、就労支援で28名（令和5年度）が自立した。朝の巡回、夜回りをを行い、路上生活者及び生活困窮者への声掛け、移動相談も実施。ベトサダとはヨハネによる福音書5章の一節、エルサレムの羊の門近くにある池のこと。「水が動く時に最初に入る者はどんな病気でも癒される」。

（推薦者：今川 かおる）

当施設を推薦して下さった支援者の方から最初にお話をいただいた時は断ろうかとも思いました。初めて聞くことでしたし、それに何より我々が表彰されるような大層なことをしている認識がなかったからです。迷いました。しかし支援して下さっている方のご厚意で、ある意味推薦者の方から表彰したいと言われているのと変わらないことでもあり、それに何より審査など通らないだろうとも思っていたため、無下に断ることもないだろうと思い推薦をお受けしました。

それが、あれよあれよとお話は進みこうして表彰されました。

改めて当施設の創設者：真鍋千賀子氏の懸命な努力が皆様の目に触れることになりました。私も救われた一人です。恩返しのつもりで始めたこの取り組みも気づけば10年経ちました。真鍋さんからかけられた言葉を忘れたことはありません。真鍋さんどうですか？見てくれていますか？表彰を受けたこと、喜んでくれますよね？

時代は刻一刻と移り変わっていきます。情報が溢れる現代で人は取捨選択を常に求められるようになりました。その代わり何が本当に大切なものなのかを見失いやすくなってしまいました。当然時代に合わせ生活をするには必要です。利用者のニーズに応えることも必要ですがやはり生きるということ、生活をするということ、働くということ、根底にある人としての大切なことまではいくら時代が変化しても変わらない、変えてはいけないと思うのです。

我々の行っている活動は本来必要としている人がいないということが理想です。ですが現実はどうもそううまくいきません。当施設はこれからも求める人がいる限り活動を続けていくことでしょう。支援している側ではありますが、何が大切なことなのかを

しっかりと見極め考え、常にこれで本当に良かったのかと迷い悩み、利用者の方と一緒に「自立とは何か」を考えて取り組んでいきたいと思えます。

改めまして今回このような大変名誉ある賞を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。



▲相談会にて相談対応



▲他団体合同相談会の様子



▲ホームレスへの声かけ



▲学生の取材中の写真



▲施設利用者による町内ゴミ拾いボランティア



▲施設利用者に同行して不動産屋へ

認定NPO法人 ヒカリカナタ基金



理事長

竹内 昌彦

岡山県

幼少期に失明した竹内昌彦さんは「途上国の視覚障がい者にもあん摩の技術を習得する機会を設けて自立を支援したい」と考え、2011年にモンゴルに、2015年にキルギスに私財を投じて盲学校を開くと、入学を希望する子どもたちの中に、治療をすれば見えるようになる子どもが少なくないことを知った。貧困が理由で治療や手術を受けられず、盲人として生きる覚悟を決めた子どもの境遇に心を痛めた竹内さんは2017年にヒカリカナタ基金を設立。これまでにモンゴル、キルギス、カンボジアなどのアジアの7か国で1,000人以上の子どもたちにヒカリを届けることができた。更なる目標5,000人以上を目指して支援の呼びかけを続けている。竹内さんは生後12か月の時、天津から引き上げ船で帰国途中にひいた風邪がもとで、右目の視力を失い、左目のわずかな視力だけが残った。故郷岡山の学校では目が見えないことで壮絶ないじめと差別を受けたが、両親の深い愛情や自らの行動力でそれを克服。1964年のパラリンピック東京大会には盲人卓球で出場し金メダルを獲得した。その後、盲学校の教員となり結婚。誕生した長男の健吾さんは、重度の脳性小児麻痺を患っており、7歳でこの世を去った。こうした経験を含め「見えないから見えたもの」というテーマで、全国各地の学校や要望のある場所で、これまでの35年間で3,500回以上の講演会を行っている。

(推薦者：更生保護法人 備作恵済会 古松園 常務理事 岩戸 顯)

(推薦者：岡山放送株式会社 代表取締役社長 鈴木 裕一)

認定NPO法人 ヒカリカナタ基金の願い

私は終戦の年（1945年）に生まれたため、栄養失調と感染症に襲われ、8歳の時に失明してしまいました。しかし、すばらしい両親に恵まれ岡山盲学校に入学し、母校の教師を務め終え現在に至りました。その間、障害者理解を求める人権講演会に招かれ、47都道府県で3,000回以上の講演を行ってきました。そのときいただいた講師料はどうしても自分のためには使うことができず、アジアの開発途上国で苦しんでいる視覚障害者のために何かできないかと考え、モンゴルとキルギスに日本あん摩の指導や生活訓練を行う小さな盲学校を創りました。

ところが、ある日その盲学校の先生から電話がかかってきました。「入学してきた男の子を診察したお医者さんが、この子の目は簡単な手術をすれば見えるようになると言われた。手術費は5万円だけど、そんな大金はどこにもない。何とかできないでしょうか」と言うのです。「目が見えるようになる」。なんて希望に満ちたうれしい言葉でしょう。私は反射的に「お金はすぐに送るから…」

と答えていました。調べてみるとそのような子どもたちが大勢いるのです。とても私のお金だけでは間に合いません。友人たちと話し合い「ヒカリカナタ基金」を立ち上げ、みんなのお金を集めて送ることにしました。

それから10年後の2025年1月に、やっと初期の目的であった1,000人の子どもの目に光を届けることができました。目の手術を終えて包帯が取れ、子どもたちが「見える！」と言ったとき、親たちは言葉より先に涙を流し、私たちに向かって手を合わせて拝むのです。子どもたちはきょとんとしていますが、後になって「自転車に乗れるようになった」「友達とサッカーができる」「お医者さんになって目の見えない子どもの目を治したい」と喜びや希望を語ってくれるのです。子どもたちとその家族、そしてそのまわ

りの人たちは、目を治したのが日本人だということを忘れないでしょう。そして困っている日本人を見つけたら、きっと助けてくれると思います。これこそが日本国憲法に根差した本当の日本の安全保障ではないでしょうか。

今は目が見えるようになった子どもにクレヨンとスケッチブックをプレゼントし、彼らが描いた絵を持ち帰り、眼科や企業の待合室などに飾っていただき、絵のレンタル料で次の子どもの目を治すという循環型の支援活動も行っています。次の目標は5,000人の子どもの目を治すことです。いつの日か世界中から「目のことで困ったら日本人に相談しろ」と言われるようになりたいものです。



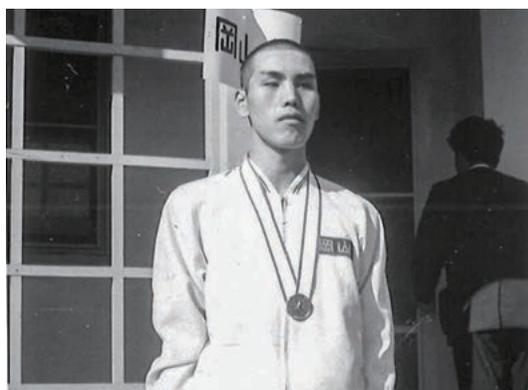
▲2023年 カンボジア母親が泣きながらの感謝



▲2023年 カンボジア手術後の子どもと



▲2021年8月25日 パラ山陽朝刊



▲1964年11月 東京パラ金メダル



▲カンボジアカリタスタケオ眼科病院写真



▲カンボジアで視力回復手術を受けた子どもが描いた絵を日本でレンタルアートとして活用し、その収益を次の子どもの手術代に充てる事業を実施している

札幌おやこ面会交流の会（あやの会）



代表

内田 信也

北海道

札幌おやこ面会交流の会、通称「あやの会」は、札幌市で弁護士や家事調停委員らが2007年に設立し、離婚などが理由で別れて暮らす親子の面会交流を、親たちの力だけでは実施できない場合に支援している。一般に面会交流は、離婚をめぐる夫婦の紛争のなかで、子どもの立場が希薄なまま決められることが少なくない。あやの会では子どもの権利と成長を最も大事に、子どもが「また会いたいな」と思うような面会を目指し、面会の積み重ねにより、良い関係が形成され、子どもの心身の安定を育むことを目的としている。具体的には、支援員が親子双方の日程を調整し、面会の日取りを決め、交流のために用意した専用の支援室で親子の様子を見守る。寄り添い続ける支援員の存在で、離婚後頑なだった親たちの心にも変化が現れ、親がお互いの立場や状況、子どもの将来を冷静に考える時間が生まれ、子どもの学費や生活費の支援も継続して行われるようになり、進路の選択肢が増えるといった効果がゆっくりと現れてくる。親が支援員を介さなくても自分たちの手で面会交流ができるようになっていくことを目指しているが、あくまでも子どもの視点に立って、子どもに寄り添い、子どもの声に耳を傾けながら、面会交流のサポートを行っていく。

（推薦者：札幌後見支援の会 顧問 半藤 政一）

私たちは、これまで20年間にわたり、「子どものため」の面会交流実現へ向けて支援活動を続けてきました。実際に担当するのは、家庭裁判所調査官や調停委員の「元職」で、平均年齢70歳。みなさん、高齢ではありますがなかなかのスペシャリストなんです。

離れて暮らす子どもに、早く会いたい父親と、できるだけそうしたくない母親との心の綱引きは、今も昔も変わりません。そんな中でも子どもは日々成長しますから、面会交流は限りなく個別的にして流動的で、親が子どもの成長を信じて待つ、という時間軸を意識した対応がことのほか重要です。この時間軸を意識せずに終始攻撃的な姿勢を貫いた父親に対して、20歳を過ぎても面会を拒絶し続けた事案がありました。一方で、母親が要求する理不尽な条件をのんで限定的な面会交流を10年間続け、子どもの成長をじっと待った父親が、子どもとの信頼関係を回復させ、お互いになくってはならないパートナーになった事案もありました。もちろん、私たちが10年、20年びっしり関わるわけではなく、せいぜい、子どもが小さいうちの2～3年のお付き合いなのですが、子どもの意志を尊重し、親が自分たちの力で親子関係を再構築していけるまでの「程よい」支援をするのが勘どころです。早い解決が望ましいのは言うまでもありませんが、私たちが扱う事案のほとんどは、家庭裁判所の調停手続を経て、二人だけでは実施できないので、「あやの会」を利用するという合意をしてやって来ます。ですから、あやの会に来るまでに結構な時間がかかっているわけです。私たちは、これまでの経過、実績を踏まえて、子どものための面会交流を模索します。面会交流は、たった一度だけのイベントではなく、その後も継続しなければ意味がありません。面会を

続けるためには、父や母の成熟や気長な努力、また、子の成長を待つ心がとても大事です。これはいくら法制度が変わっても代替えができません。時間がかかるかもしれませんが、親たちを自分たちの力で「子どものための面会交流」をやり切れるようなレベルまで「お導き」というのが、面会交流支援の「肝」です。

ところが、今の時代、多くの親たちは、待つことができません。すぐに成果や結果を求めたがります。子育ては、工場での物作りとは違うのですが、なかなか腹の据わった親たちが少なくなりました。その狭間を埋めながら、少しだけ、子どもたちのための「お役に立ちたい」そんな控え目な気持ちで、これからも気長に続けたいと思います。



▲総会で挨拶される内田代表



▲運営委員会のメンバー



▲年一回発行の会報



▲運営委員会のメンバー



▲支援室



▲支援室

社会福祉法人 ゆうゆう舎 ぱれった・けやき宮城野



理事長
釣舟 晴一

宮城県

「ぱれった・けやき宮城野」は、社会福祉法人ゆうゆう舎の事業所のひとつで就労継続支援B型事業所。2002年に設立された社会福祉法人ゆうゆう舎は、仙台市の病院の精神科でソーシャルワーカーとして働いていた釣舟晴一さんが、1989年に入院患者に何かして過ごしてもらおうと院内に開いた小さな「作業所けやき」が前身。利用者が安心してのんびりと、やりたいことをしながら過ごせる場所を念頭にしていた作業所は、ゆったりと時間がある分、かえって利用者同士の衝突が起きたり、何もせずにいるだけだったので、時間をかけて小規模作業所から地域活動支援センターへ、その後就労継続支援B型事業所へと移行していった。現在、利用登録者は37名。宮城県の農家と連携し地元産の野菜や果物の乾燥加工、パウンドケーキやクッキーの生産、七夕やこけしなどを刺繍で施した雑貨や小物を製作・販売している。丁寧な仕事は評判を呼び、販売量も増加。利用者の工賃時給もアップし、安定した運営を続けている。利用者が継続して作業出来るよう作業場の環境整備にも力を入れてきた。ひとりひとりの個性と「自分で決める」ことを大切に、利用者が「今日も楽しかった！また明日も来よう」と思ってもらえる場づくりを目指している。

(推薦者：一般社団法人 WATALIS 代表理事 引地 恵)

この度は荣誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。

受賞後には利用者の方々から、すごいね！嬉しいね！と言った声で盛り上がりました。自分たちの事業所がこのような賞をいただいた事に大変感謝しております。

ぱれった・けやき宮城野は、社会福祉法人ゆうゆう舎の一事業所であり、就労継続支援B型事業所という障害を持った方が雇用契約を結ばずに働く場所です。1989年精神科病院の一角で始まった作業所が前身であり、現在まで主に精神障害をもつ方と共に歩んできました。

利用されている方の中には、精神科病院に長期入院の経験、人間関係での孤立、偏見などで苦しい思いをしてきた方がいます。精神科受診自体が周囲からの偏見にさらされることもありました。私たちはそんな方々が集まることのできる場所をつくり、気兼ねなくやり取りできることを目指してきました。

そんな彼らは「何かしてみたいけど、自信がないな」と言った状態で利用開始するため、当初は利用者の方が無理なくできる仕事だけを求めていました。そのため依頼はほぼなく、どう過ごそうか考える毎日で、利用者さんたちはやる事も無く、時間だけはあるので他人が気になっていざこざが起こる事もありました。そんな中、お客様から「商売の相手としてお願いをしている」と言われた事で、「福祉だから」を出来ない理由にしていたと気づきました。

それからは、依頼された仕事は丁寧に行い納期を絶対守る事を続けた結果、人づてにお仕事をいただけるようになりました。利用者の方に支払う工賃が増えるに従い、利用者の方は仕事に真剣に向き合う様になり、いざこざはいつしか無くなっていました。

現在では活動内容も広がり、乾燥野菜加工、菓子製造、内職、手芸、ランチ営業をしています。その中から自分に合った作業が選べるようにし、小さなステップアップを積み重ねて自信に繋げ、それぞれ持つ目標に近づいて欲しいと考え支援しています。

近々では、様々な方面から試作依頼が来ています。毎日違う作業が目白押しの日々ですが、「忙しい事は良い事だよね！」と話す利用者さんがいました。その言葉の通り、やる事がたくさんあると言う事で、働く励みにもなっていますし活気が出てきたと実感します。

職員も利用者の方も対等な立場で言い合える関係性を続けながら、「今日も楽しかったね。また明日も来よう！」と思える安心できる場所を目指し、どうすれば今よりもより良く地域の中で生きられるかを考え続けます。

今回の受賞は地道に利用者支援と生産活動の両方を担って来た職員一同大きな励みとなりました。

今後は、感謝を胸に気持ちを新たに、ぱれった・けやき宮城野が安心した場所であり続けるために尽力して参ります。



▲クッキー製造 (テレ東ナナナちゃん)



▲乾燥野菜(乾燥した芋を粉ふるいにかける作業)



▲乾燥野菜(人参乾燥機に入れる)



▲乾燥野菜(大豆を機会で粉碎する作業)



▲商品一例(手芸、菓子、乾燥野菜)



▲販売会

NPO法人 移動支援Rera



共同代表

村島 弘子

宮城県

宮城県石巻市、東松島市、女川町で、送迎できる家族等の不在、高額な交通費の支払いが困難で、移動手段を持たず外出を諦めている高齢者や障がいのある人、生活困窮の住民を対象に移動支援を行っている。2011年東日本大震災で甚大な被害を受けた石巻地域は自家用車が流され、タクシー会社の被災、公共交通機関の機能も喪失。札幌の障害福祉団体が中心となって災害移動支援を立ち上げたのをきっかけに、それを引き継ぐ形で、2013年に法人化。復旧・復興の流れの中で、被災した住民のフェーズの変化に合わせて、通院、買い物など、さまざまな送迎支援を行う。福祉車両5台と普通車1台を助け合い送迎として使用し①実費料金（2キロ100円）を利用者から受け取る②電話予約制となっており、年間延べおよそ5,000名を送迎する。ボランティアドライバーは国交省指定の講習会に参加し、先輩ドライバーの実地指導も受けられる。また孤立しがちな移動手段のない住民と一緒に買い物や温泉、お墓参り、お花見などに行く「付き添いお出かけ送迎」を月1回実施。外出が限られた利用者が人と社会と繋がり、心豊かに過ごせることを目指す。2024年度末までに延べ21万5千人の足となった。この活動は少子高齢化の日本で特に地方の移動困難者の最後の砦となっている。

(推薦者：NPO法人 麦の会)

この度は「社会貢献者表彰」を受賞させていただき、誠に光栄に存じます。社会貢献支援財団様をはじめ、私どもの活動に日頃よりご理解とご支援をいただいております関係各位に、心より厚く御礼申し上げます。

東日本大震災がきっかけとなり活動を開始した移動支援Rera（レラ）は、全国のボランティアや支援者の方々に応援をいただきながら、間もなく活動開始15年を迎えようとしています。

壊滅的な被害を受け、色を失った町の中で、移動手段に困っている方々を一人でも多く送迎しようと、避難所、仮設住宅などから、自宅の片付け、病院や仮設のお風呂、時には火葬場など、昼夜問わず送迎を行っていたのが、活動の始まりです。

自らも被災した住民ボランティアなど、地域が引き継いだ活動は、NPO法人となり、地域に根付いた活動として、自力で外出が困難な方々の送迎を行い続けてきました。

活動は、ハンドルを握ることに留まらず、一人一人の暮らしを見守り、寄り添うことに徹し、積み重ねた送迎人数は、のべ21万名を越えています。

今回の受賞は、これまで活動に携わって下さった人たち、同じ車窓から町の復興を見届けてきた利用者さんたち、私たちへの応援・ご支援を通して、東北の復興を見守って下さっている全国、世界の皆様のことを改めて思い起こし、振り返り、そして今日の姿を認め合う機会になりました。そのステージと一緒に立って下さった方々に、レラとして心から感謝の気持ちをささげたいと思いました。

私たちの活動は、道路運送法上『登録を要さない』、ガソリン代等の実費相当のみを利用者さんにご負担いただく、『助け合い送迎』として実施しています。それ以外の活動資金は「復興」、「被災者支援」の取り組みに対する補助金、助成金、寄付に依存してきました。「発災15年」は“節目”とも呼ばれ、「平時への移行」、「復興の完結」などのキー

ワードとともに復興財源の減少、消失が進み、活動の持続性の厳しさは増えています。

高齢者・障害者・生活困窮者などの支援機関やNPOが取り組んでいる、移動支援や生活支援に対し、交通事業者、自治体などの理解が進み、“役割分担”を行いながら、活動・事業が安定した収支構造や人員体制の中で、必要な方に必要な支援を届けることが出来る活動となるよう、地域の方々との連携を深め、「誰もが健全で心豊かな生活を送ることが出来る社会」を目指してまいります。

この度は、誠にありがとうございました。



▲送迎風景



▲お出かけ送迎_お買い物



▲お出かけ送迎_バラ園ドライブ



▲お出かけ送迎_ポッチャ



▲お出かけ送迎_車内スナック



▲車いす送迎

認定NPO法人 フードバンク北九州ライフアゲイン



理事長

原田 昌樹

福岡県

2013年、原田昌樹さんは福岡県で唯一のフードバンクとしてフードバンク北九州ライフアゲインを設立（2014年法人化）し、「すべての子どもたちが大切」とされる社会の実現を目指して、食料支援、学習支援を通じて子どもの養育環境を守る活動に取り組んでいる。理事長で牧師でもある原田さんは、ご夫妻で2000年頃から里親をしたり、夜回りをして孤立する人や人生をやり直したいと願う人たちと出会い共同生活を送った。その経験から、幼少期の家庭崩壊や虐待などで受けた心の傷は大人になっても癒えず、苦しみ続いていくと知り、幼少期の養育環境を地域で守る必要があると考え、活動を開始した。現在、北九州市内の支援が必要と想定される子育て世帯1万5,000世帯の内、約4,000世帯とつながっている。協力企業は約240社、地元商工会議所との連携でロス食品ではない野菜・果物なども要支援世帯に配布している。給食のない夏休み・冬休みにはお腹いっぱい大作戦を実施し食料を届けた（2024年度は延べ2,600世帯）。子ども食堂（3か所）、無料学習塾、無料自習室も運営。そのほか企業や地域自治会などと協働して実施した地域住民が集う場には、300人超が参加。さらに乳幼児育児の孤育て防止として家庭訪問型子育て支援事業ホームスタートを開始し、親への傾聴、家事、育児、外出のサポートを通して親子に寄り添う。すべての子どもは社会の宝と考え、こども一人ひとりの未来を守るために尽力している。

（推薦者：社会福祉法人 北九州市社会福祉協議会 会長 小林 一彦）

このたびは、私どもの活動にこのような名誉ある賞をいただき、心より感謝申し上げます。

「お母さんはいつも私たちがおなかいっぱいになってから食べます。今度は一緒に食べられます。ありがとうございます。」

こどもの字で書かれたお便りが私たちの元へ届きました。食品を届けたご家庭からでした。きっとこのお母さんは自分の食事は我慢して、こどもたちに先に食べさせているのでしょうか。おなかいっぱい食べさせたい母親の願いに胸がぎゅっと締め付けられます。

厚生労働省「国民生活基礎調査」（2022年）によると、日本のこどもの貧困率は11.5%。一見豊かに見える現在の日本でも、こどもの9人に1人が貧困という深刻な社会問題が存在しています。ひとり親世帯の半数が経済的に厳しい生活を強いられ、物価高騰も重なり、親子の暮らしは日々厳しさを増しています。その一方で、日本では年間464トンもの食品がまだ食べられる状態で廃棄されています。（農林水産省及び環境省「令和5年度推計」）。食べることができないこどもがいる現実と、捨てられる食品の現実。この矛盾に、私たちは強い危機感を抱きました。

私たちフードバンク北九州ライフアゲインは、企業や個人から寄贈いただいた食品を、困難を抱える親子に無償で届ける活動を行っています。食料支援を入口に、「助けてほしい」の声に応え、孤立した親子を社会とつなぐことを目指しています。現在、継続支援世帯は150～170世帯に及び、受け取りの場ではスタッフが話を聴き、必要に応じて行政や専門機関と連携して支援を拡げています。

さらに私たちは、地域で子どもを育てる力を高める活動にも取り組んでいます。子

ども食堂、無料学習塾・自習室、乳幼児家庭への訪問型子育て支援「ホームスタート」などを通じ、親子が孤立せず、地域全体でこどもを見守る仕組みづくりを進めています。

困難な状況でこどもを守ろうとする親がいる限り、私たちは寄り添い続けます。「ひとりじゃない」と感じられた瞬間、親もこどもも前を向く力を持つことができます。かけがえのない宝物であるこどもたちが、そして今を生きる大人たちが「生まれてきてよかった」と心から思えるやさしい社会、誰も取り残すことのない助け合いの社会を目指しています。

そして、将来、北九州での活動モデルが全国のこどもたちに寄与できることを願っています。



▲食料支援準備



▲ランドセル譲渡会



▲街頭募金活動



▲子ども食堂たらふく亭



▲子ども宅食「お腹いっぱい大作戦」箱詰め作業



▲子育てひろばもぐもぐ

NPO法人 北東北搜索犬チーム



理事長

岩本 良二

青森県

災害救助犬と囑託警察犬（搜索）両方の仕事をする高度に訓練された搜索犬を育成し、社会の安全と安心に貢献したいと、2008年に科学捜査研究所に勤務する岩本良二さんを中心に有志で設立されたボランティア団体。育成した犬は、世界共通の資格である国際救助犬連盟に認定され、搜索犬としてハンドラーと共に、災害で土砂や瓦礫に埋まり行方不明になった人を搜索する。東日本大震災や、静岡県土砂災害、能登半島地震による火災時も20時間かけて車で出勤し、行方不明者の搜索に貢献。また山での遭難者、認知症で行方不明になった人を発見するといった功績も挙げている。出勤要請に備え、日々の訓練を欠かさずに行い、青森県や青森市、弘前市等と災害時の出勤に関する協定を結ぶなど、行政からの信頼も厚い。また搜索犬やハンドラーを増やすための訓練や、搜索犬への理解を深めるためのデモンストレーションを兼ねた講演会を実施。2015年からセラピー犬の育成と、セラピー犬活動も実施。福祉施設への慰問も行っている。

2008年に囑託警察犬の指導手であった私は、当時、社会問題化していた認知症を患った行方不明者を搜索する犬の育成を目的とする団体を、仲間と一緒に立ち上げました。その時に災害救助犬の訓練方法を取り入れることになり、先輩の指導の方と一緒にそれぞれ愛犬を連れ、岩手県や新潟県に行き指導を受け、仲間と訓練し、2010年に全国災害救助犬協会の災害救助犬の認定試験にその2頭が合格しました。

そして、この2頭の災害救助犬を使って青森県警察の幹部にデモンストレーションなどを行い、その有効性を証明して、青森県警察囑託警察犬の試験項目に、行方不明者搜索に特化した警察犬である「搜索犬」を加えていただき、現在に至っています。

翌年の2011年3月には東日本大震災が発生し、私は災害救助犬「文太」と一緒に釜石の沿岸部で2か月間にわたって11回行方不明者の搜索を行いました。この時、広大な被災現場を目の当たりにして、災害救助犬の数が全く足りないことを痛感しました。

これを機に翌年の2012年にNPO法人北東北搜索犬チームを立ち上げ、災害救助犬と囑託警察犬を育成し、その犬たちと一緒に行方不明者の搜索に取り組み、2015年には社会の要請に応じてセラピー犬を育成し、老人ホームや障がいのある子どもたちの施設でセラピー犬活動も行うようになりました。

現在、災害救助犬11頭、囑託警察犬4頭、セラピー犬10頭が活動していますが、それぞれ、未だに頭数が十分ではありません。特に災害救助犬は、その過酷な業務からほぼ10歳を過ぎると引退となるため、常に後継の犬を育てていなければ間に合いません。飼い犬を災害救助犬に育てる希望を持っている人を発掘する広報活動を常に継続する必要があります。

また、組織が発足して14年目となり、犬だけでなくスタッフも高齢となり、若い人が活動しやすい魅力のある組織に変わって行く必要性も高まっています。

災害時の行方不明者搜索において、死亡率が急激に高まる72時間を経過した際においても、行方不明者のご家族に寄り添ってご遺体の搜索もできるように犬の訓練を行っています。また、災害時の避難所にセラピー犬が常駐し、被災した方々、搜索に参加

した消防、警察、自衛隊の方々の心を癒す仕事ができるように訓練を行っています。

今後も常に社会の要請に耳を傾け、「真に社会に役立つ捜索犬（災害救助犬と嘱託警察犬）とセラピー犬を育てよう！」をチームのコンセプトにチーム一丸となって日々の訓練を続けて行きたいと思えます。

最後に、今回の貴財団からの受賞はこの上ない励ましとなりました。チーム一同、心からお礼申し上げます。



▲2024年8月10日撮影 青森県防災ヘリコプター「しらかみ」への搭乗訓練



▲2024年10月15日撮影 青森市内老人ホームでのセラピー犬のふれあい活動



▲2024年10月30日撮影 青森県総合防災訓練の現場に向かう災害救助犬



▲2024年1月7日撮影 能登半島地震の輪島市内の行方不明者捜索



▲2021年7月10日撮影 静岡県熱海市の土石流災害の行方不明者捜索



▲2020年10月14日撮影 青森県消防学校の救助科の災害救助犬の授業

NPO法人 YOU&MEファミリー



代表理事

玉木 由美

バングラデシュ／埼玉県

バングラデシュのカジブールにある貧困地域の子どもたちのための学校（幼・小・中）を作り「教育こそが、未来をつくる」をモットーに誰もが自分らしく生きるための教育を提供している。代表の玉木由美さんはバングラデシュ人のリナ・ワハブさんと共に貧しい子どもたちのための学校「YOU&MEインターナショナルスクール」を2007年に設立。当時、学校のなかった地域で大きな歓迎を受け、人気校となった。同スクールでは生徒会、クラブ活動、清掃活動、図書館運営、保護者会、各行事なども実施。年に3回日本のスタッフが訪問し、特色のある学校づくりを行っている。また、地域の病院と連携して、歯科検診と予防医学教育を実施。さらに、生徒を社会的経済的に自立させたいと、クラブ活動の中からパソコンクラブと洋裁クラブは2020年から職業訓練クラスとして実施することとし、持続可能な活動とするために2023年には収益化事業を開始している。この事業に卒業生がビジネススタッフとして関わっている。また卒業生のグループが自分たちも学校を支えて行こうと、寄付募金活動を始めた。将来、資金面での自立を目指している。日本国内では2015年にNPO法人YOU&MEファミリーを設立し、学校運営を支えるために会員交流、活動報告会、チャリティーコンサート、講演など、啓発活動を活発に行っている。

(推薦者：NPO法人 YOU&MEファミリー)

このたび、社会貢献者表彰という大変名誉ある賞を賜り、心から感謝申し上げます。ご尽力いただきました各関係皆様、そして、これまでこのバングラデシュの教育活動を支えてくださってきた多くの皆さま、本当にありがとうございます。

YOU&MEファミリーは、バングラデシュにある「YOU&MEインターナショナルスクール」を支援するNPO法人です。少々個人的な話になり恐縮ですが、代表である私は、自身の病気と家族の死から生き方を見つめ直し、それまでの教師の仕事を辞め、国際教育協力を目指して単身バングラデシュに渡りました。そこでバングラデシュ人夫妻と出会ったのですが、その夫妻、特に奥さんが長い間自分たちの土地で貧しい子どもたちのための学校を作りたいと願っていたのです。そこで女性二人で、ご主人の協力のもとに学校を設立する運びとなりました。それが、2007年に設立された、この「YOU&MEインターナショナルスクール」です。この学校は、「教育こそが、未来をつくる」をモットーに、当時学校がなかったこの地域に希望を与えてきました。その後、スタディツアーなどで日本からの支援が増えたことから、2015年に日本でもNPO法人YOU&MEファミリーが設立されました。この間、多くの方々の支えがあったことを思い出し胸が熱くなります。

YOU&MEインターナショナルスクールには、年に3回日本のスタッフが訪問し、現地教師たちと共に、生徒会、クラブ活動、清掃活動、図書館運営、保護者会、地域病院連携、各行事など、特色ある学校づくりを目指して教育活動を行っています。日本国内でも、会員相互の集い、現地活動報告会、チャリティーコンサート、国際イベントへの参加、講演活動など、皆様の協力により多くの活動をさせていただいています。

バングラデシュでは、児童婚が大きな社会問題となっているのをご存じですか。本

校も、この問題に直面したのです。そこで、貧しい生徒を社会的経済的に自立させたいと、2020年に職業訓練クラス（洋裁・パソコン）を始めました。さらに、この訓練クラスを持続可能にするために、2023年より洋裁・パソコンクラスからビジネスを始められています。将来的には、職業訓練クラスだけでなく、学校本体も現地のビジネスや寄付活動で自立運営していくことを目指しています。「教育こそが、未来をつくる」と信じ、これからも小さな歩みを続けてまいります。皆さま、今後どうぞよろしくお願いいたします。



▲洋裁クラブ



▲Y&Mファミリーの集い



▲学校全体の様子



▲歯科検診



▲授業の様子



▲図書館プロジェクト

NPO法人 心魂プロジェクト



代表理事

有永 美奈子

神奈川県

「本物のパフォーマンスに出会うのが困難な難病児にこそ最上級のを届けたい」という想いで、2014年から劇団四季・宝塚歌劇団出身俳優らを中心に難病児・障がい児・きょうだい児・子どもを支える家族にオリジナルミュージカルやソング&ダンスなど、パフォーマンスを届けている。デリバリーパフォーマンスは、小児病棟、特別支援学校、養護学校、施設、放課後等デイサービス、父母の会、能登半島地震の被災地などで、オンラインを含め年間300日公演する。これまでに対面公演回数はおよそ900回、オンライン公演及び番組配信はおよそ4,200回の実績がある。オンライン無料配信、年間有料プログラム「心魂TV」も運営し、難病児、障がい児、きょうだい児、その家族、医療関係者が安心してつながれるコミュニティを作っている。有料プログラムには140名の登録者がいる。14名のプロパフォーマーに加えて、全国のボランティアの社会人、心魂キッズ団、若い世代やきょうだい児などパフォーマンス表現者の育成事業にも力を入れる。特に心魂キッズ団にとっては、成長と自己肯定感を高める機会となっている。海外にも輪を広げるべく、これまで台湾、ミャンマーでも展開、今年は台湾などで海外公演が予定されている。「こころ、うごく。たましい、よろこぶ！」言葉通り、希望や勇気を与えることに寄与している。

(推薦者：田倉 千菜美)

このたび「社会貢献者表彰」という大きな励ましをいただき、心より感謝申し上げます。私たち心魂プロジェクトは、劇場に来ることが難しい子どもたちへ“劇場空間”そのものを届けたいという思いのもと、難病児・障がい児・きょうだい児とご家族へ音楽やパフォーマンスを届ける【デリバリー・パフォーマンス】を続けてまいりました。舞台に立つプロの俳優だけでなく、子どもたち自身や医療福祉従事者、ご家族も表現者として輪に加わり、「支援する／される」を越えて共に生き、共に創る場を育ててきたことが私たちの誇りです。

日々の活動の中では、病棟公演で出会った子どもが「来てくれて嬉しかった」と笑ってくれた瞬間や、付き添いのご家族が「パフォーマンスのおかげで現実を忘れ、心がふっと軽くなった」と伝えてくださったことが忘れられません。心を動かす体験は、心を整え、前を向かせる“生きるエネルギー”なのだ実感しています。

コロナ禍で対面活動が止まった際、私たちはオンラインへ舵を切り、全国どこにいても同じ時間を分かち合える生配信を3,700回以上重ねました。画面越しでも届く笑顔と心の繋がり、そして「ひとりじゃないと思えた」という言葉に、表現活動の可能性を幾度も教えられました。再び全国ツアーで会えるようになった今、直接手を取り合う喜びとオンラインで広がった仲間の存在が重なり、活動は新しい形に進化しています。

今回の受賞は私たちだけのものではありません。「私も笑顔を生み出したい」という強い想いでステージに立つ、病気や障がいと闘う子どもたち、日々を支えるご家族や医療現場の皆さま、寄り添い走り続けてくれる仲間、そして応援してくださる一人ひとりの力の結晶だと受け止めています。

この先は「難病児・障がい児・きょうだい児」に留まらず、生きにくさを感じる子どもたち（不登校・ネグレクト・親と暮らせない・ひとり親・経済的困難・海外にルーツを持つなどのこども達）やご家族、そしてその方々を支える活動団体同士が出会い、繋がり、未来を変える化学反応を起こす為の場を創りたいと考えています。困難に直面したときも支え合える輪を広げ、未来に生まれてくる子どもたちの選択肢を増やしていけるよう、これからも一歩ずつ挑戦を続けてまいります。



▲パフォーマーメンバー（全員）



▲ミャンマー子ども病院公演



▲楽しむ親子の様子



▲心魂キッズ団



▲心魂主催イベント 2025年3月 大さん橋集合写真



▲台湾小児病棟公演（子供に選んでもらった国のパフォーマンスを行う）

株式会社 アップルファーム



代表取締役

渡部 哲也

宮城県

宮城県仙台市で福祉と収益を兼ね備えたビジネスモデルのレストラン「自然派ビュッフェレストラン六丁目農園」を2010年にオープン。スタッフの約7割は障がいのある人たちだが、ほとんどの利用客はそれに気づかない。ホール、調理場、ピザ焼き、洗い場などそれぞれの得意や適性を生かした人員配置を行い、力を伸ばしていく事を大切にしている。試行錯誤の結果、レストランはビュッフェ形式のランチのみの営業で売上を確保。料理は見た目も味も好評で、最寄り駅から徒歩20分という立地にも関わらず、地元では予約がなかなか取れない店として知られている。代表取締役の渡部哲也さんは、様々な職業を経験する過程で、親族が交通事故で重度障がい者となったことをきっかけに、障がい者の家族の苦悩を実感し、障がい者が経済的に自立できる環境作りをしたいとこのレストランを起業した。障がい者スタッフの給与は宮城県の最低賃金から始まり、力をつけるに従い昇給していく。一般企業への転職も支援している。レストランの他、お弁当やオードブルの販売、LED有機野菜栽培と野菜の選別、障がい者グループホームや保育園、障がい児支援施設など、ニーズに応じて事業を増やし、全11事業を展開している。日本の障がい者の雇用率を上げていくこと、またパリにある世界的に有名な障がい者が働く「ジョワイユ」のようなカフェを日本に作ることを目標としている。

(推薦者：税理士事務所ランニングパートナーズ 代表 鈴木 陽介)

株式会社アップルファームは、「障がい者雇用の実現」を掲げ、自然派ビュッフェレストラン「六丁目農園」をはじめとする福祉・保育・飲食事業を通じて、地域での就労の場と学びの機会を広げてきました。仙台市若林区のいわゆる「三等立地」といわれる場所にあえて出店し、居抜き物件や規格外野菜を活用しながら、お金をかけ過ぎない工夫で付加価値を生み出してきたことは、地域資源の「再生」と社会課題の解決を両立させる挑戦でもありました。

レストランのキッチンやホール、加工場、バックヤードなど、多様な持ち場に障がいのあるスタッフが配置され、それぞれの特性に応じた「適材適所」の仕事を担っています。作業を細分化し、見える化と標準化を進めることで、一人ひとりが「自分の役割」を実感しやすい環境づくりを心がけてきました。その結果、初めは一つの工程をこなすだけで精一杯だったスタッフが、次第に複数の工程や後輩指導を任されるようになるなど、「働くこと」を通じて自信と誇りを育んでいく姿を、現場で数多く見てきました。

また、障がいのある方を「福祉サービスの利用者」としてではなく、「ともに働く仲間」「納税者」として位置付けることを会社の理念とし、最低賃金以上の水準での雇用を当たり前にする取り組みも続けてきました。この姿勢が評価され、仙台市の「四方よし」企業表彰での受賞や、市の奨学金返還支援対象企業への登録など、地域社会からの信頼という形で返ってきたことは、大きな励みになっています。一方で、飲食・福祉ともに環境変化が激しいなかで、事業収益を安定させつつ賃金水準の向上と人材育成を両立させることの難しさも、日々痛感しているところです。

今後の展望としては、これまで宮城県内で培ってきたモデルを、他地域にも広げて

いくことを視野に入れていきます。とはいえ、自社だけで全国展開を急ぐのではなく、同じ志を持つ仲間や企業にノウハウを共有し、「真似してもらおう」ことで、障がい者をはじめとする社会的弱者の就労の場を増やしていくことが現実的だと考えています。また、障がい者、高齢者、子どもが自然に交わる共生の拠点づくりや、精神疾患のある方のリハビリセンター、企業が参加しやすい「学びと体験のヴィレッジ」の構想など、地域全体で支え合う仕組みづくりにも挑戦していきたいと思えます。

アップルファームの存在理由は、社会課題の解決そのものだと考えています。「ここで働きたい」「ここで働き続けたい」と言われる現場の一つでも多くつくり、働くことの素晴らしさを次世代の子どもたちに伝えられる会社であり続けることが、これまでの歩みへの感謝に応える道であり、これからの社会への責任だと感じています。



▲就労支援（施設管理業務）



▲就労支援（レストラン）



▲就労支援（レストラン）



▲周年行事



▲食事会（利用者周年行事）



▲アート作品展

NPO法人 こうちネットホップ



理事長

田中 きよむ

高知県

地方の路上生活者は、少ないだけに目立ちやすいため、大都市のようにあるところに一定数集まっているわけではなく、ひっそりと見つからないように生活している。気づかれにくく福祉に結びつくことが困難な状況になっていて、まさにその状況にある高知県で路上生活者を支援しようと、高知県立大学の田中きよむ教授らが2010年に設立したボランティア団体（現NPO法人）。毎月ボランティアらと夜回りを行い、食料やカイロなどを路上生活者に配りながら、必要なものや困りごとの聞き取りをする中で、彼らは経済的貧困に加えて、関係性の貧困、ひいては心の貧困に陥っていることを知った。そして必ずしも定住先を見つけることや、故郷に帰ることを望んでいるわけではないことも知り、必要な時や緊急の時に繋がる先があることが、彼らにとって一番望ましいことだと、何十年も関係を保ちながら見守っている。一方で、DVや家庭に居場所がなく、安定した収入が得られるまで、一時的に滞在できる場所を求めている人たちの存在も知り、2021年からシェルターとしてアパート2部屋所有して、生活の立て直しを支援している。

（推薦者：NPO法人 あまやどり高知 代表理事 岡村 啓佐）

私たちは、2010年にホームレス支援のボランティア団体として出発し、都会とは異なり見えにくいホームレスの方々へのコミュニケーションを交えながらの夜回り支援として、お声がけ、食材提供、連絡先を書いたポケットティッシュやリーフレットの配布、携帯式懐炉や衣類の提供をおこなってきました。あわせて、無料低額診療所や福祉事務所への同行支援や就労支援も必要に応じておこなってきました。さらに、学習会や講演会の開催、先進地視察調査などもおこなってきました。

2022年1月からは、シェルター事業としてアパート2室を「ステップハウス」としてオープンしました。そして、同年4月、NPO法人の認証を受けました。

「ステップハウス」のスタートによって、それまでの夜回りでお会いする野宿生活者の方々だけではなく、DV被害、虐待、親子間暴力、パワハラ、依存症、コロナ後遺症等に悩み苦しむ方や、様々な障害をもつの方々、刑余者、ヤングケアラー、ひきこもりなど、たとえ家があったり家族がいたりしても、自分の心の居場所を探し求めている人々として「ホームレス」を広く捉え直し、支援活動をおこなってきました。そのような多様な生きづらさを抱えた方々との出会いが生まれると同時に、行政や専門機関、関係団体との連携・協力関係も生まれてきました。

このような活動を続けながら、ボランティア団体発足時を起点として、今年で15周年を迎えることができました。細々とした活動を曲がりなりにも続けて来られたのは、関係者の方々の温かい励ましやご協力があったからこそであり、謹んで心よりお礼申し上げます。

今後は、炊き出しなどをするなかで、潜在的なホームレスの方々の発見につないだり、「ステップハウス」を増設することによって、増えつつあるシェルター・ニーズに応じ

たり、常駐的なスタッフを確保しつつ事務局体制を強化していく夢をもっております。そして、学生や卒業生など若い世代も、「心の居場所」の交流・相談相手になって、多様な生きづらさを抱えた人々に寄り添える関係づくりをしてもらえたらと願っております。



▲ホームレス支援 夜回り



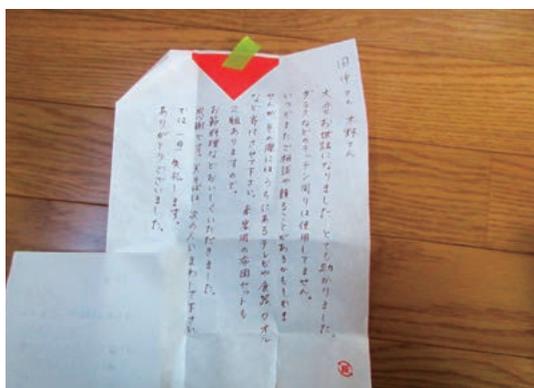
▲夜回り パースデーケーキのプレゼント



▲リーフレットや夜回りで配布する食品など



▲「ステップハウス」の案内



▲ステップハウス利用者（DV被害者）からの礼状



▲夜回りの際の記録ノート

NPO法人 日本動物介護センター



理事長

山口 常夫

岐阜県

災害救助犬や介助犬などの育成とペットを適切に飼育できるように講演会や相談会を実施するため、犬の訓練士山口常夫さんが岐阜県で2008年に設立したNPO法人。顕著な活動として、東日本大震災発生後、飼い主と一緒に避難することができなかった48頭の犬たちを無償で預かり、里帰りを年に2回行ってきた。震災発生後、支援物資と共に被災地に向かったが、被災した飼い犬の実態を目の当たりにした山口さんは、岐阜に戻って犬舎を整備し、被災地の行政に犬たちを受け入れる旨を伝えて回った。福島県飯館村から村に残された犬たちの捕獲を依頼され、100頭近くを保護し、48頭をセンターに連れて行った。犬たちの様子を動画に収め、飼い主に伝えていたが、2013年に21頭を車に乗せて福島まで里帰りさせた。飼い主と犬たちの喜ぶ姿を見てその後も毎年里帰りを実行している。また、飯館村の被災者から託された子犬の内、山口さんの元に残った一頭の黒い子犬を「じゃがいも」と名付け災害救助犬として育てることにした。じゃがいもは認定試験に落ち続けたが、11回目の挑戦で合格することができた。このじゃがいものエピソードは「あきらめないところ」を伝える本として出版され、教科書にも採用された。年間約30回に及ぶ講演会を行って災害時にペットと避難するための日頃の備えについて啓発し相談を受け付けている。

(推薦者：宇佐川 照孝)

当NPOは人間と動物がともに生きていける社会の実現を図りたいと立ち上げた団体です。

2011年東日本大震災の時は何か出来ないかと、はじめは災害救助犬と共に行動していましたが、犬たちはどうしているのだろうと避難所を回り、一緒に暮らせないワンコたちを無償で預かりお世話をすることにしました。

気づけば48匹、その他にも今まで施設にいた犬がいたので賑やかになり、大切な子を怪我や病気にならないように気を使いながら、お世話をしてきました。

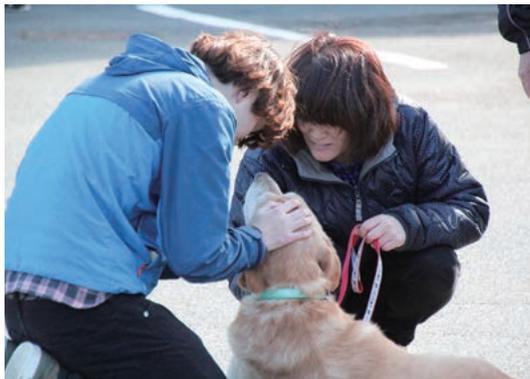
当初半年もすれば復興して帰せるだろうと思っておりましたが、もうすぐ15年がたとうとしています。その間、1年に2回、犬たちを連れて面会を楽しみにしている飼い主さんの為、片道600kmの道のりを少しの時間ですが里帰りしています。私たちには見せない喜びかたをする犬たちを見ると家族の絆を感じ、続けてきてよかったと嬉しい気持ちになります。最後の1頭になるまではその里帰りも続けようと頑張っていました。15年もたつと今までご支援下さった方も減り、苦勞をしております。

そんな中、私たちの活動を推薦してくださり、評価していただいた事は大きな励みになりました。

熊本、能登の震災でも動物たちの支援、お預かりをし、災害がおきた時に市町村と提携してスムーズにお預かり出来る仕組みづくり取り組んでいます。

今までお預かりしている子を施設でお世話して下さったボランティアの皆様、あたたかいご支援をしてくださった皆様方のおかげで続けることが出来ています。

改めて皆様に感謝申し上げます。



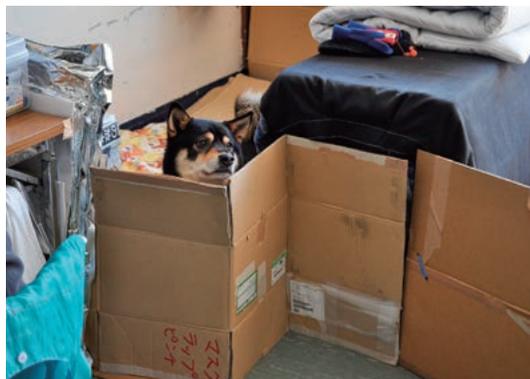
▲福島県飯館村から45頭の犬を預かりました



▲家族の一員として子どもたちが早く一緒に過ごせることを願っていました



▲介助犬育成普及事業の中、イベントでの実演



▲宮城県からは2頭の犬を預かりました



▲熊本地震で行き場のない10頭の犬たちを預かりました



▲災害救助犬と市町村の防災訓練に毎年参加しています



▲東日本大震災 宮城県南三陸の避難所を訪問



▲飯館村への里帰り集合写真

NPO法人 Piece of Syria

シリア／大阪府



代表理事

中野 貴行

13年間続いた長い内戦で、未だ不安定な状況が続き、紛争地というイメージを払拭できないシリアで、避難した子どもたち、国内に残った子どもたちに教育支援を2016年から続けている。「Newsweek世界が尊敬する日本人100人」にも選ばれた代表理事の中野貴行さんは「かつて、シリアの人々の国民性はとても心豊かなおもてなしの精神に溢れていて、かつ文化的でもあり、当時は日本よりも人気の観光地だった」と述べ、そんな本来のシリアを伝えることをミッションに、日本国内での講演を通じて発信している。長きにわたる紛争で多くの有形無形文化財を失うことから、復興に向けてシリア国民に並走するべく、避難先で子どもたちが忘れかけている母国語を学ぶ機会を提供し、避難生活で失われかけた社会性や集団行動を取り戻すため、現地でSAKURA幼稚園を開園し、シリアの未来を築くための若い力を育む活動や、失われつつある伝統的音楽や舞踊をデータ化して残す活動にも力を注いでいる。かつてのシリア人が、一番大切にしていた家族との時間を取り戻すことを願って活動を続けている。

(推薦者：波多野 草太)

このたびは、歴史ある社会貢献者表彰を賜り、誠にありがとうございます。

私たちPiece of Syriaは、シリアで教育支援を行う団体です。2016年に設立し、紛争下で教育の機会を失った子どもたちに学びの場を届ける活動を続けてきました。今、私がこうして代表として言葉を述べていますが、この活動の主役は私ではありません。10年以上続く戦争の中で、自らも深い傷を負いながら、それでも未来に希望を託して活動を続ける現地スタッフ。厳しい状況の中でも「学びたい」と学校に通う子どもたち。そして、長年にわたり私たちの活動を信じ、支えてくださった支援者や仲間たちの存在があってこそ、今日があります。

この活動の原点には、私自身の忘れられない出会いがあります。

私は戦争前の2008-10年、青年海外協力隊としてシリアで活動しました。当時のシリアは、医療や教育は無償で質も高く、人々は旅人を温かく迎えてくれる社会でした。そこで出会ったのが、活動先の村で一生懸命に手伝ってくれた12歳の少女です。彼女に将来の夢を尋ねると、「お金持ちになりたい」と答え、その理由として「お金は天国に持っていけないから、どう使うかが大事。子どもたちの夢を叶える学校を作りたい。そのために勉強して医者になりたい」と話してくれました。私は「きっとできるよ」と伝えました。すると彼女は、「あなたが夢をバカにせず応援してくれるから、夢を持てたのよ」と教えてくれました。いつか、この子が地域を、国を、あるいは世界を変えるかもしれない、とも思い、一人一人が持つ可能性を学びました。

しかし、私が日本に帰国した翌年、シリアで戦争が始まりました。人口の半分以上が避難生活を余儀なくされ、就学率は100%から6%へと急落。数年後、彼女が住む村の小学校が処刑場となりました。いても立ってもいられず、私はシリア周辺国・欧州を巡り、難民となった人々や支援団体の声を聞きました。その中で、「子どもたちの夢を叶える学校を作りたい」と語るシリア人青年と出会い、2016年から共に活動を始めました。

以来9年間、私たちは5万人以上の子どもたちに教育の機会を届けてきました。今年4月には15年ぶりにシリアを訪れることもできました。残念ながら、少女との再会は叶いませんでしたが、彼女の家族と再会し、「また帰ってくる」と約束しました。

一人ひとりの力は小さくとも、パズルのピースのように想いが重ね合わせれば、社会を変える大きな力になる。その信念から、私たちは団体を「Piece of Syria」と名付けました。今回の受賞は、これまでの歩みを認めていただいたと同時に、これからも活動を続けていく責任を改めて自覚する機会となりました。教育を通じて、子どもたちが生まれた場所によって未来を諦めなくてよい社会の実現を目指し、今後も一歩一歩、誠実に取り組んでまいります。



▲小学生向けの心のケアアクティビティ



▲アラビア語を学ぶSAKURA幼稚園の生徒



▲地震緊急支援を実施している様子



▲図工に取り組むSAKURA幼稚園の生徒



@Kiseki Michiko

▲トルコにおける難民向け補習校の授業



▲トルコ補習校を訪問する代表中野